

白選五十首



山本かね子

やまもと・かねこ 1926年、新潟県生まれ。1951年、職場を同じくする富小路禎子の歌に出会い「沃野」に入会、植松寿樹に師事。64年第1歌集『ものどらま』で新歌人会賞、『月夜見』で第13回日本歌人クラブ賞受賞。02年より沃野発行人。『風響り』ほか、最新歌集『花遊行』まで9冊の歌集がある。

褐色のしべのみ遣しばら散りぬ息深く吸ひリルケに戻る

白き手袋きりりとはめて別れ告ぐあざやかにわれを取戻しつつ

凍結を拒める湖がふと見する淋しさとおもふ翳ゆるる水

並びゆく電車の車輪ひたむきに廻りをり持続といふは苦しき

子を抱く広さとおもふわが胸をすり抜けて冬の笛を吹く風

邂逅を遂げたる夢の腕のなかに光となりてわれはひろがる

ことごとく奪ふにまかせ風響りのなかひとひらのわれは眠れる

喝采のなかに怒りてわれはあり疾駆らぬけもの獅子がひれ伏す

巨大なる白毛の犬 顎の下に幼児は神のごとくに笑ふ

冷えゆるむたたみを踏みてゆく素足いづこか春の清水湧く音

川茜に身は照らされて逝く水とただひとたびのいまを映え合ふ

『ものどらま』

『風響り』

『瑠璃苔』

戸籍謄本が必要になり、本籍地の役所へ出向いた。結婚して家を出たことのない私の場合は、筆頭者を父にしなければならず、五十年も前に亡くなっていく父の名を書いて長女と記入する。はるかな父の名を書くたび、何ともいえない気持になる。ここへ来るのも一仕事である。

転籍しようと思いつき、届けを出すと、「結婚はいつですか」と聞かれた。「していません」と答えると、「えっ、一度もですか」と、二十歳くらいの青年がじろじろと私の顔をのぞき込んで聞くではないか。失礼な、ひとはそれぞれ事情というものがある、結婚する人もいない人もある。「そうよ、一人ですよ」と答えると、「では未婚と書いて分籍届

火と刃物厨にありて起ちてゆくわれに一途の生遂げしめよ

老いし母がこの世の庭に焚く花火夏の名残りのくれなるの華

人の心も双手に扱へといひたまふ玻璃鉢を捧げ思ひいでつも

胸乳ある身は折ふしに揺るるなり花散るゆふ月わたる夜半

待たるるは老母にてもよし白桃を抱へゆく夜の風甘き道

染井吉野咲き極まりぬ今生に母ありて共に佇つ花あかり

はかなかる老の身ひとつこの家に在りて夜闇のどこかが温し

朝光にかならず覚めよわが老母闇にまぎれて旅立つなかれ

鬼しばり母子草春蘭わが庭の野草浄土に雨ひかり降る

紫蘇を食す飛蝗つくづく身の青し汝が息の緒やかぐはしからん

長夜の闇にまぎれ入らんとする母を引戻し引戻しわれはぼろぼろ

世に遅るるまた楽しくて月光の曲にしろがねの針を下ろしぬ

えごの花たちまち散りて白き道 惜しまず時もことしの花も

白髪になり果つと賀状届きたりむかしこの胸を乱したる筆跡に

一生こころの伴侶にてよし春の夜を風のごとくに声聞かせくる

閉ぢし眼を風が撫でゆく夕ぐれや無為なるときなんとゆたけき

夏の木陰冬は日溜りのやうな人ひとり欲しゆふべひぐらし鳴けり

大き白蛾一夜をりにし窓ガラス亀裂あらずや冷え冷えと澄む

われにまだ母あることよるこびとせつなさに降る晩秋の雨

一万歩達成とよるこび気付きたり死へ一万歩あゆみたりしを

【月夜見】

【野草讃歌】

【華月懸命】

けを出してください」と言ったものである。

指示に従って未婚と書きながら、だんだん

おかしくなつて、思わず笑いがこみ上げた。

そうか、私は未婚であった。なんと久しぶり

に聞く言葉か。若い頃とは違つて、だんだん

縁遠い言葉になり、独身、独り暮らし、最近

は独居老人の仲間入りをしてしまった。そう

か、私は「未婚」であった。未婚とはなんと

将来性に富んで夢のある言葉であろう。楽し

くなつて、その夜、私はこんな歌を作つた。

未婚と書きおもしろい笑ふとびきりの一人に

出会ふ夢ある身なり

かくして、私のちよつと寂しいたった一人

の戸籍が出来上がったのである。

次は失敗談を一つ。昨年、私は富小路禎

子さんの死に遭い、葬儀からその後の歌集出

版と目をまわすように多忙であつた。その中

で自身の歌集「花遊行」をまとめたが、校正

のときもう一度見直す時間がなく、この書名

にルビをふることを忘れてしまった。

後日、某結社誌が紹介記事を書いて下さつ

たとき、「はなゆうこうと読む」とあつた。

残念だったが、私のあとがきに読み違いをさ

そう原因があつた。「遊行のおもしろも添えて

書名とした」と書いたのがいけなかつた。

「……も添えて花遊行とした」と書くべきで

あつた。

ゆたかなるものよ壺より平鉢へ移されし水おだやかに澄む

九十二歳のたからものなる置きトイレ清め清めて春立ちにけり

〔残照の丘〕

可燃物と人をいふ言葉胸を刺し胸に落ちやがてふかく安堵す

エノラ・ゲイと母の名を付け原爆を搭載し発つ 聞きて忘れず

母よ見事に終りたまひぬ死を前にみんな優しいのねと言葉遣して

〔涅槃西風〕

母を呼ぶ声聞かんとか最後まであたたかかりき耳のうしろが

ひと一人過ぎたる家に冬日さし野の鳥は来る去年の水場に

別るる親もう無し夜爪おもひきり切りつつ胸辺しんしんと冬

死ぬときは死ぬがよろしと母の声桜花はなの空より光りつつふる

埋立てし海の中道なかみちひた駈くる一直線とふ道のさびしさ

〔花遊行〕

遅るるはたのしも前をゆく人の汗の首をすべる七星天道虫

わがかたへかすめしは風 直立ちすくたてありし心を乱してゆけり

切れ味よき白紙にハツと切られたり鮮し指に一線の朱あか

席ゆづらんと青年が立ちて微笑せりわれは故郷に畑打つ母か

限りあるいのちを生くるものよとて擁いだかんに腕の広さこれしき

吾子とふものあらばこれよりは悲しみの歲月ならめ母老いゆくと

実験だつたといふ原爆に数多死せり二十世紀の罪に首垂る

清め塩みづからに振り門を入る独りのすがた極まりて冬

唄ひたかりし子守唄そは遠き日のねんねんころり母の声すも